
冬の巫女

マ多ビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の巫女

【コード】

N6060Q

【作者名】

マ多ビ

【あらすじ】

季節は冬、とても静かで、少し乾いたその日、俺は一人の女の子に出会った

「ほら、今日も持ってきてやったぞ」

正月休みも明けた、とある出勤前の早朝、正確には8時前、俺は数日振りに、家の近く建っている、ある寂れた、名前も知らない神社へと立ち寄った。

寂れた、と言う表現をしたが、少し前までは季節が季節だけに、初詣にやってくる近所の住人たちで、それなりに賑わっていなかったこともない。

しかしまあ、今となっては見る影もなく、時間帯も関係してこの場所、境内にはスーツ姿の俺一人しかない。

まだ一月と言うだけあって、スーツの下にシャツを二枚着込んだだけのこの格好では、流石に酷く冷える。が、流行のダウンジャケットとかいう代物を買うには、まだ家計の調子があまりよろしくないのだ。こればかりは、ただのサラリーマンにはどうしようもない。

それでも、この就職氷河期の中で、今のビジネス会社に入れたのは充分幸せなことなのだろう。とは言え、24というまだまだ夢見がちな年頃の俺には、少し物足りなくもあるわけで……。

「わざわざ毎日暖めて貰ってるんだ、冷めないうちに飲んどけよ？」

俺は左手に提げたコンビニの袋へ、適当に潰した牛乳パックを押し込んだ。

目の前には、底の低い青い皿に入った牛乳と、それを前にしてチロチロと尻尾を振る、一匹の猫。どうやらこいつ、ここ縁の下に住処にしているらしく、以前いつものようにこの神社の前を通った

ときに見つけ、今ではこうして、毎朝コンビニの牛乳を飲ませてやるのが日課になっているのだ。

自分でもバカだとは思う。しかし、その日の俺は仕事で失敗した翌日で落ち込んでいて、なんとなく、一人ぼっちでのそのそと歩くこいつに、あるうことが同情なんてしてしまって、結局今の関係が出来上がってしまった。

日々の牛乳代も馬鹿にはならないけれど、今更この日課をやめる気にもなれない。思えば初日でやめておけばよかった。そうすれば、今頃はその浮いた金で、防寒具の一つや二つ、簡単に買っていたかもしれない。

白に黒斑の混ざった、お世辞にも綺麗とは呼べないようなそいつは、俺が頭を撫でてやるとすぐに、湯気を出している白い水面に小さな舌を滑らせた。暖めたとは言っても。コンビニからここまでではそれなりに離れているので、もうけっこう冷めてしまっているだろう。まあ猫の舌にはそれくらいが丁度良いだろうから、俺もわざわざここまで走ったりはしない。

「……………はあ」

無意識の溜息に嫌気が差したが、ここでダラダラしているわけにはいかなかった。俺は立ち上がり、そいつに一言「行ってくる」とだけ声を掛けて、柱のボロボロになった本堂に背を向けた。

ふと、暗い赤色をした鳥居に目がいった。その向こう側から、徐々に朝日が昇ろうとしている。日の光が俺を照らし出した頃、俺の足元には、既に牛乳を飲み干したあいつが歩み寄ってきていた。どうやら、随分長い間ボーっとしていたようだ。

そいつは怪我をしているらしい左の後ろ足を庇いながら、俺の足に身体をまとり付かせ、頬をすり合わせてきた。こいつがよくする、甘えるときの仕種だった。こいつの妙に甘え癖があるところは、まあ嫌いではなかったけれど、今は構っていられないのだ。

「今日はもうダメだ。俺みたいな新人が遅刻したら、まためんどくさいことになる」

俺の言葉が分かったのか、そいつは淋しそうな顔こそしたものの、そのまま足を引きずって、縁の下へと帰っていった。

名前は付けていない。あの怪我からするに、もう長くはもたないだろうし、そもそもあいつは野良なのだ。最初はここで飼われているのかと思っただが、首輪もないし、住職も見たことがないから、おそらくそうなのだろうと、勝手に推測しただけだが。

暗闇に消える黒い尻尾を見送った俺は、ハツとして右手の腕時計に目をやった。短針が差していたのは、8と9の丁度真ん中辺り、長針を見る余裕はなかった。

「ヤッベー!!」

俺はカバンを置き忘れていたことにも気づかず、そのまま全速力で駆け出していた。

「はぁ……」

散々上司に大目玉を食らった翌日、俺はいつも通りに暖めてもらった牛乳を手に、例の場所へと向かっていた。

今日は休日だったけれど、昨晚疲れのせいで探しにいけなかったカバンを探すため、わざわざ平日と同じ時間に起きたのだ。

あの後、やる気はあるのかとか、新人のクセにたるんでるだとか、そんな感じの内容の説教を、頭の禿げ上がった上司に食らって、結局昨日は雑用で一日を終えることになった。

幸い、財布はコンビニで出した後はポケットに入れているから、昼食抜きなどという地獄を味わうことにはならなかったが、俺の心は昨日一日でかなり疲弊した。

カバンを失くした場所に心当たりはあった。大した物が入っていないが、それでも当然盗まれるのは困る。まあ、あんな場所に置いてあるものを捨つやつなんていないんじゃないかとも思ったが、やはり放っておくのはなんとも不安だった。

結局、あいつに構ってなんかいるから、こうして寒い思いもして、上司にも叱られたわけだが、俺は相当お人好しなだろう。それでも、あいつを見捨てることは考えなかった。この場合はお人好しと言つより、むしろ馬鹿、だろうか。

そうこう考えていると、俺はいつの間にかそこへ辿り着いていた。未だに俺は、コンビニからここまでの距離の不安定さに狼狽することがある。大方、日々の俺の気分の浮き沈みが激しいせいだろうとは思うが。

そしてこの日は、今までで一番、ここまでの距離が長い日だった。その証拠に、俺の足取りは、まるでフルマラソンの距離を歩いてきたかのように重い。

そんな倦怠感を振り払いながら、俺は境内を見渡した。俺の記憶が正しければ、カバンはあの青い皿のそばにあるはずだったが、どうにも見当たらない。

「おいおい……マジか」

どうやら当てが外れたらしい。とは言え、ここ以外に思い当たる場所もない。他の場所を探す気力もなく、俺は本堂へ上がる石段に腰を下ろした。極力防寒装備だったが、やはり石段と触れたところが冷たい。

「どうすっかな……」と、それらしい独り言を言ってみたが、半分もう諦めてもいた。ここしか心当たりがないどころか、俺はここに

置き忘れたと確信していたのだ。しかしそこに、カバンはなかった。なら答えは一つ、盗難というやつだ。

相も変わらず閑散とした境内。数本だけ植えられた松の木の隙間を風が吹きぬける度に、ヒューっという寒々しい音が、俺の鼓膜を揺らす。手袋をしていなかった俺は、暖を取るために、まだ暖かい牛乳パックを掴んだ。そう言えば、今日はあいつの姿がない。いつも俺が来ると、すぐに縁の下からのそのそと姿を現すのだが。

まあしかし、思い返せば時々だが現れないこともあったし、その日は牛乳だけ置いておけば、帰りにはちゃんとなくなっていた。何も気にすることは無い。誰かに拾われたのならよし、どこかで事切れたなら……それもまあよし。

目の前に建つ鳥居に、二羽のスズメが止まっている。曇り空だったためか、いつものような陽光はこの場所には差さず、灰色の町並みはいつもよりはつきりと見えた。

そろそろ帰ろうと思い、立ち上がった。どうせ探す気は起きないし、このままここにいても、寒いだけで何も良いことはない。

俺は青い皿のところへ行き、袋の中の牛乳パックを取り出した。このカイロともお別れか、などという訳の分からない惜別を仕舞い込んで、牛乳を皿に注いだ。

「ここに置いてくからな」

あいつに一声掛けるつもりでそう言つて、俺は踵を返した。今思えば、土日はいつも来ていなかったから、あいつも現れなかったのかも知れない。まあ、猫が曜日を理解しているのかは知らないけれど。

次に来るのは月曜日かなと考えながら、俺は歩き出だした。

「待って」

背中に受けたその声で、俺は動き出したばかりの足にストップを掛けた。本当にそう言われたのか分からなかったので、振り返りこそしなかったが。

「待つて」

今度は間違いなかった。風の音がそう聞こえてしまったならかなり危ないが、俺もまだ、人間の声を聞き間違えるほどボケてはいない。

振り返ると、さっきまで誰もいなかったはずの石段の前に、黒い髪を背中まで伸ばした、中学生くらいの女の子が立っていた。切れ長の目とすつきりした鼻筋、薄い唇が印象的で、なかなかの美人だ。背は俺よりも30cmほど低い。俺も自分の身長ははつきりとは知らないが、それなりに高いとは思ってる。

白地に赤い飾りが付いた、巫女さんが着ていそうな服を身に纏っていたが、その格好は綺麗なものとは言い難かった。袖は少しほつれ、所々に枯葉の欠片が付いていた。

「……………君は」

「これ」

女の子はそう言って、手に持っていた黒い塊を差し出してきた。よく見れば、いや一目見ただけで分かる。あれは俺が失くしたカバンだ。

「あ、それ……………」

「あなたの」

「え……………あ、あぁ」

その子は、トコトコと俺に歩み寄り、スッとそのカバンを差し出

してきた。恐る恐る無言で受け取り、中身を確認する。この子を疑うわけではないが、何も盗られていないとは限らない。

しかし、中身は昨日の朝に家で確認した通り、全て揃っていた。見栄だけで持ち歩いている煙草もあるし、ライターも、ケータイもある。こうして見ると、本当に大した物は入っていない。

その子は俺に向ってニコツと笑うと、どこからか板のようなものを2枚取り出した。子どもの頃に良く遊んだ、羽つきの板だ。

「カバン、ありがとう……。でも、君は」

「はい」

「え？」

俺の言葉を遮り、その子は片方の板を俺に渡してきた。訳が分からなかったが、真っ直ぐに見つめられた俺は、結局その板を受け取ってしまった。

女の子はまたニコツと笑うと、トコトコとおかしな走り方で鳥居の方へ駆けて、どこからか取り出した羽を投げ上げて、右手の板でパカんと打ってきた。ひよろひよろと飛んだ羽は、俺の数メートル前にポトンと落ちる。

その子はムツと頬を膨らませて、また変な走り方で羽のところへ来ると、拾い上げた羽根をその場でパカんと、また俺の方に打ってきた。

今度は俺まで届き、俺は反射的にその羽を打ち返してやった。弧を描いて山なりに飛んだそれは、女の子が振り回す板をすり抜けて、彼女の頭にコツンと当たり、石の床にポトンと落ちた。

女の子はまたムツと膨れて、拾った羽を食い入るように眺め始めた。

別に羽が悪いわけじゃないと思うけど、とは言えず、俺は右手の板をよく見てみた。あまり新しそうではなかったものの、それなりに手入れはされているようだった。

「あの、君は一体…?」

やっとのことで俺が女の子に声を掛けると、彼女は不思議そうに首を傾げた。

「君は、ここに住んでるの?」

尋ねてみたが、よく考えてみれば、そんな訳はない。何と云っても、今まで数ヶ月間、通い詰めていたのだ。住んでいる人がいるなら、出会わないなんてことはあるはずがない。

だとすれば、近所の学生か何かかなと考えたが、その子は薄い笑みを浮かべながらコクンと頷いた。

どうやら肯定の返事らしいのだが、なんとも疑わしい。女の子一人で、こんな荒れた建物に住むなんて、出来るかもしれないが、普通はしない。

「一人で?」

この問にも、その子は何の迷いもなく頷いた。その目を見る限りでは、どうやら嘘をついているわけではなさそうだ。イマドキの中学生がどれくらいのものなのかは知らないが、こんな子もいるんだなど、変に納得してしまった。

しかしだとすると、最近になって住み始めたのかも知れない。それならばまあ、今まで見たことがなかったのも、頷けなくはない。

「いつごろから?」

「ずっと前から」

「……そう」

結局、まともな答えは得られそうになさそうだった。まあ、別にここに住むのが悪いとは言っていないが、なにやら不気味なのだ。今まで一度も会わなかったことも、急に現れたことも。

「はやくはやく」

その声を掛けられて、俺は我に返った。また少し離れたところへ移動したその子が、羽を投げ上げ、パカンと打つ。再び俺の前で落ちた羽を、恨めしそうに睨むその子が、なんとなく可愛かった。

「いいか？ もう少し羽の下を打つようにして、高く飛ばしてみな」

女の子にそう言って、俺は羽を打ち上げて、落ちてきたところをキャッチした。その羽を渡して、その子にもやらせてみる。

パカンという音とともに打ち上がった羽を見て、その子は目を輝かせた。が、落ちてきた羽を頭にぶつけ、また頬を膨らませる。

既にここに着いてから二時間ほどが経過していた。俺も羽つきは得意じゃなかったけれど、この子に教えてやることくらいはできた。まあ、カバンを見つけてくれたお礼もしたかつたし、今日は暇なので、別に構わないかなと思う。

ところで、この女の子は練習熱心ではあるけれど、なかなか上達が遅かった。どうやら運動神経はあまりよくないらしい。それに加えてこの子、足を怪我しているらしく、格好のこともあるって激しい運動はできないので、今はこうして、打ち上げるだけの練習をさせている。

「ね、そろそろ打ち合いがしたい」

「大丈夫なのか？」

「痛くないよ」

「いや、足もだけど…」

俺が言いたいことが分かったのか、その子はまたムツとして、トコトコと俺から距離を取った。

羽を投げ上げ、パカン。ポトリ。グスン。はぁ。

どうやらまだまだ時間が掛かりそうだ。まあ、休日の暇も潰せて、良いことなのかもしれないけれど。

その日から、俺は朝起きる時間を早めるようになった。勿論、あの子に羽つきを教えるためだ。

最初は退屈しのぎだったが、あそこにもう一度訪れた日曜日にラリーが4回続いて以来、俺自身も言いようなない喜びを感じて、毎日特訓することになったのだ。

嫌な気はしなかった。もともと趣味もこれと言ってなかったし、仕事以外にやることもない。いつもより1時間早く起きることなど、俺にとっては造作もなかった。

それになにより、俺はあの子と一緒に羽つきが出来るのが楽しかった。うまくいけばとても嬉しそうに笑って、失敗すればすぐに拗ねるところとか、そんな感情豊かなあの子に、いつしか親のような感情を抱いくようになっていたのだ。

勿論、あいつへの牛乳も、忘れずにやっている。あの日以来姿は見えないが、仕事の帰りに寄ったときには、牛乳はすっかりなくなっているの、拾われたりとかはしていないのだろう。大方、人間が二人も騒いでるから、警戒しているのかもしれない。

そしてこの日は、俺とあの子が出会ってから、丁度一週間が経った土曜日だった。

俺が神社に着くと、あの子は既に板を持ち、一人で練習をしていた。いつもの巫女服姿にももう慣れてしまって、逆にセーター姿の自分が恥ずかしくもなってきた。

最初は下手だった彼女も、今ではラリーも簡単に続けられるくらいまでに上達した。俺は殆ど変わっていないので、ラリーをしても失敗するのは五分五分くらいだった。

「早いな」

「うん」

俺に気づくと、女の子は俺に板を片方渡して、いつものようにニコリと笑った。

しかし今日のその子は、どこかいつもより淋しげで、憂いを感じさせるような雰囲気醸していた。いつもは俺を見ると飛び跳ねて喜ぶのに、じっと、彼女は笑っていた。

「……どうした？　せっかく来てやったのに」

「うん」

彼女のそんな反応が気になったが、俺は一先ず青い皿のところへ行き、牛乳を注いでしまった。

そう言えば、あいつとはもう暫く会っていない。当初の目的だったこの牛乳も、今では羽つきのついでのようになってしまうている。俺は何となくあいつに申し訳ない感じがして、心の中で謝っていた。姿を見せてくれれば直接謝れたのだが、まあ仕方がない。

「ねえ」

いつの間にか黙り込んでいた俺に、女の子が声を掛けてきた。その表情は、もういつもの彼女に戻っていた。暖かい、明るい、柔ら

かい笑顔だ。

「今日は、お話ししよう?」

その子はそう言うと、俺を促して石段に腰を下ろした。こうして並んで座ってみると、なんだか出会って間もない気がしなかった。鳥居には、今日は何も止まっていなかった。いつかのような曇り空で、風も吹かず、境内は静まり返っている。松のザワザワとした音すらも、聞こえてはこない。

「どうしたんだ?」

「大事なお話」

「……なんだよ」

すると、その子はピョンと立ち上がって、俺の前に立った。そして両腕をいっぱいに広げて、片足でクルクルと回り始める。

「…おい、一体なんなん…」

そう言いかけて、俺は不思議なことに気がついた。彼女は、怪我をしているはずの左足を軸にして回っていたのだ。

俺が止めようとしたのも聞かず、その子はクルクルと楽しそうに回り続ける。

「おい足!」

「ん、もう大丈夫。ほら、全然痛くない」

そう言うと、女の子はまた石段に座り、俺の二の腕に抱きついてきた。この子は確かに美人だったが、俺にとって、所詮は娘か親戚の子どものような存在だったので、緊張したりすることはなかった。

「なんだよ？　なんか変だな」

「……お別れなの」

「……え？」

その子が言った言葉が一瞬理解できず、俺はそんな声を上げていた。

「今日でお別れ。もう会えないの」

「……そうなのか」

でもなぜだか、不思議と心は落ち着いていた。心のどこかで、そのことを知っていたかのような、そんな、虚無感を孕んだ落ち着き。その子は笑っていた。右手には今まで使ってきた羽子板を持って、俺の二の腕にスリスリと頬すり合わせる。そんな仕種がなぜか懐かしくて、俺は無意識の内に、その子の頭を撫でていた。

「やっぱり、あなたは優しいね」

「……やっぱり、お前は甘えたがりだな……」

「一緒に遊べて、嬉しかった」

「……ああ、俺も」

俺の言葉が余韻ごと消えたとき、その子はまた立ち上がって、俺にペコリと頭を下げた。

俺は瞬きもせず、その一つ一つの動きを、しっかりと目に焼き付けようとした。でも、俺の視界は徐々にぼやけてきていて、すぐにその子の顔も分からなくなってしまった。

俺が羽子板を持った右腕で目を拭いたとき、またその子の声が、声だけが聞こえてきた。

「今までありがとう」

「……今までつて……いつからだよ……」

俺が再び目を開けたときには、もう、あの子の姿はなかった。ただ、静かな境内に、猫の鳴き声だけが響いていた。

「ずーっと、ずーっとだよ」

鳴き声に混じって聞こえてくる女の子の声は、もう殆ど聞き取ることが出来なくなっていた。目の前に落ちていた羽を拾い上げ、俺はパカんと、羽を打ち出した。しかし、その羽はポトンと地面に落ちて、ピクリとも動かなかった。

「牛乳美味しかったよ」

それが、俺が聞いたあの子の最後の声だった。

俺の他に誰もいない、静まり返った境内に、俺の手から落ちた羽子板が石の床とぶつかる、カランカランという音だけが木霊していた。

知らなかったことがある

「遂にこの神社も取り壊しね」

「仕方ないわよ。もう人が住める状態じゃなかったじゃない」

俺の隣で、巨大なクレーン車を眺めていた主婦二人が、そんな会話をしている。

「危ないので下がってくださいーい！」

ヘルメットを被り、作業服を着た男に促されて、俺とその他の野次馬達は、鳥居のあるところから数歩後ろへ下げられた。

昨日まで静かだったこの場所は今、喧しい音を立てて、今までの形をどんと失っていた。風に乗って飛んでくる砂埃に咽て、俺はまた数歩、その場から離れた。

「なんでも、縁の下から猫の死体とか出てきたらしいわよ」

「いやねえ汚らしい」

それから数分後には、野次馬達はもう一人もいなくなっていた。俺は一人でその場に立ち尽くし、今度こそ、その最後の姿を、目にしっかりと焼き付けていた。

しかし、いつの間にかまた視界が潤んできて、俺は特に寒くもないのに、右手に提げた牛乳と、持っていた羽子板と一緒に抱き締めていた。

まだまだ一月、寒い日が続くだろう。

しかし

「せっかく暖めてもらったのによ……」

これからはもう、早起きしなくても済みそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6060q/>

冬の巫女

2011年10月7日15時59分発行